

仙台市郡山遺跡（第85次調査B区）出土 石庖丁の使用痕分析

東北大学（埋蔵文化財調査室） 山 田 しょう

本資料は、仙台市郡山遺跡第85次調査B区において、弥生時代楯形囲式期の遺物包含層であるⅢc層から出土したものである。

金属顕微鏡の100倍と200倍で表面の光沢面（摩耗面）を観察した。その結果ほぼ全面に須藤、阿子島によって「パッチ状のコーン・グロス」と呼ばれた、主にイネ科植物で現れる使用痕の光沢面の斑が認められた。A面では刃部を除く全面に光沢面が発達しているが、B面では光沢面の発達が弱く、図で同じ中程度として示した部分でも、A面側の光沢斑の方がより発達している。線状痕は全体に不明瞭で、刃部で一部刃に平行するものがあるが、これは砥石の擦痕が重なったものだろう。砥石による光沢面は、斑状の明瞭なものは見られない。

使用痕の特徴は須藤・阿子島（1985）によって報告されている東北地方の石庖丁の、両面とも向かって左側が光沢面が強くなるという一般的な特徴と一致し、実験との対比から穂摘みの痕跡と解釈されるものである。刃部の光沢面が相対的に弱いのは、刃の研ぎ直しと解される。

B面上辺にも光沢面の強い部分が認められることは、この石庖丁が左手でも使用され、かつ御堂島（1989）が打製石庖丁について推定した握り方が正しい可能性を示唆する。

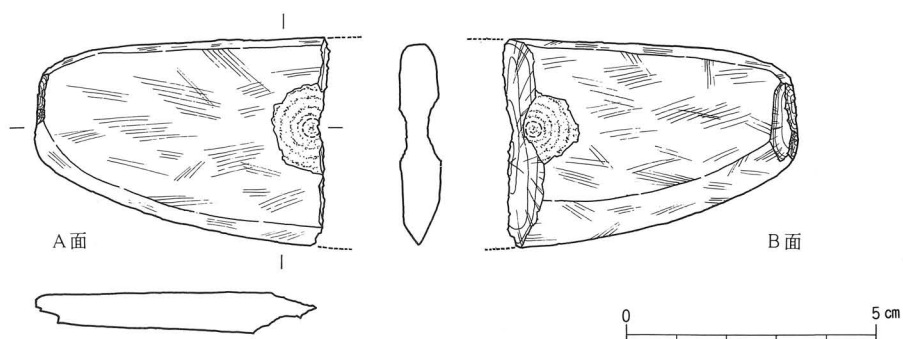
この石庖丁は折れており、かつ孔が貫通していなかったように観察されるため、穿孔中に破損した未製品と考えられた。しかし、実際には使用痕が検出されたので、孔の無い状態で使っていたか、実際には孔が、失われた側の破片に開いていた可能性が考えられる。後者の場合は孔が孔全体の中央からずれたところで貫通していたことになる。光沢面の斑は孔の縁ぎりぎりまで及んでいるが、孔の内部及び縁に形成されたものは一つもない。孔の内部は窪んでいるので、たとえ使用時に孔が存在していたとしても光沢面は形成されにくい、孔の縁に形成された光沢面が全く無いことは、この孔が使用後に開けられた可能性を支持している。他方、折れ面の縁には折れによって切断された光沢面の斑がいくつか認められる。孔に切られた光沢面の斑は無いが、これは偶然の結果とも解釈できる。そうであれば、この石庖丁は既に完成し使用されていたが、何らかの理由で孔を開け直そうとした際に、破損したと考えられる。

引用文献

須藤 隆・阿子島香(1985)：「東北地方の石包丁について」『日本考古学協会第51回総会研究発表要旨』

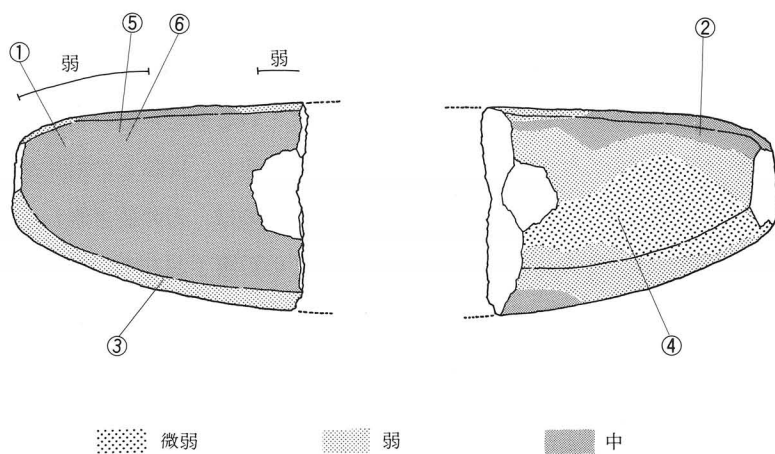
御堂島正(1989)：「『挟入打製石包丁』の使用法」『古代文化』第41巻第8号 pp.1-15

金属顕微鏡は東北大学考古学研究室所蔵のオリンパス BHM を使用させていただいた。

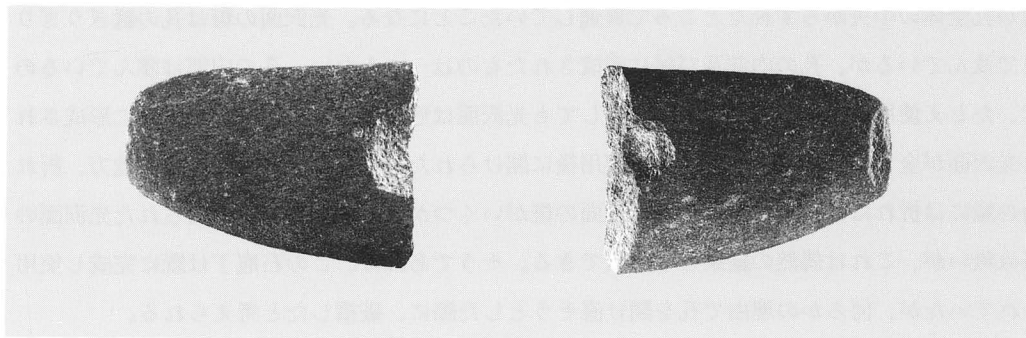


石庖丁実測図

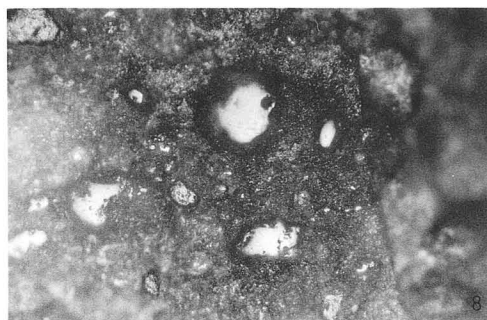
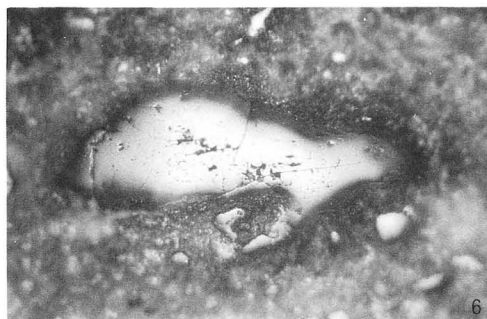
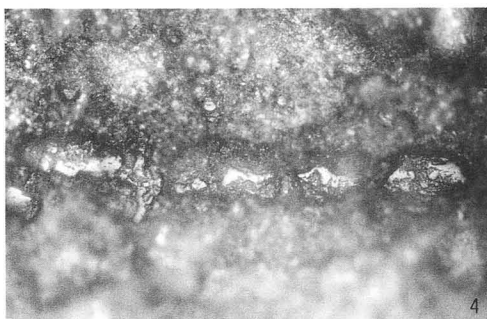
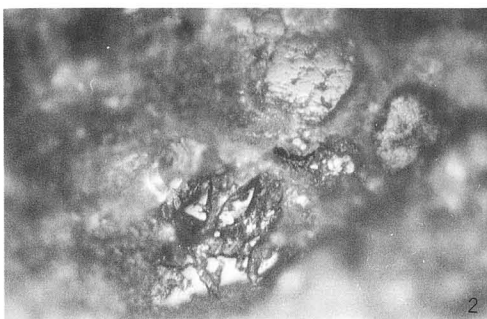
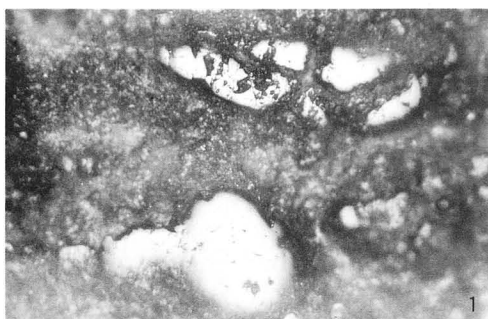
登録番号	石器名称	グリット	層位・地点	標高	石質	最大長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	重量(g)	刃角	備考	遺物番号
K-1	石庖丁	R-4	Ⅲc層	8.19m	片岩	58.35	41.70	7.10	29.15	60°	樹形開式期、欠損品	107



ポリッシュ分布図



写真



1. 5～8は——が100 μ m・2～4は——が100 μ m

イネ科植物の使用痕光沢斑 (写真の水平方向が刃の方向)

2. 砥石による擦痕(水平方向)が重なったもの

4. 水平方向の微高部が摩耗し、使用による線状痕のように見える光沢面

7. 折れ面(右端)に切られた光沢面

8. 紐穴(右端)の近くの光沢面の分布